

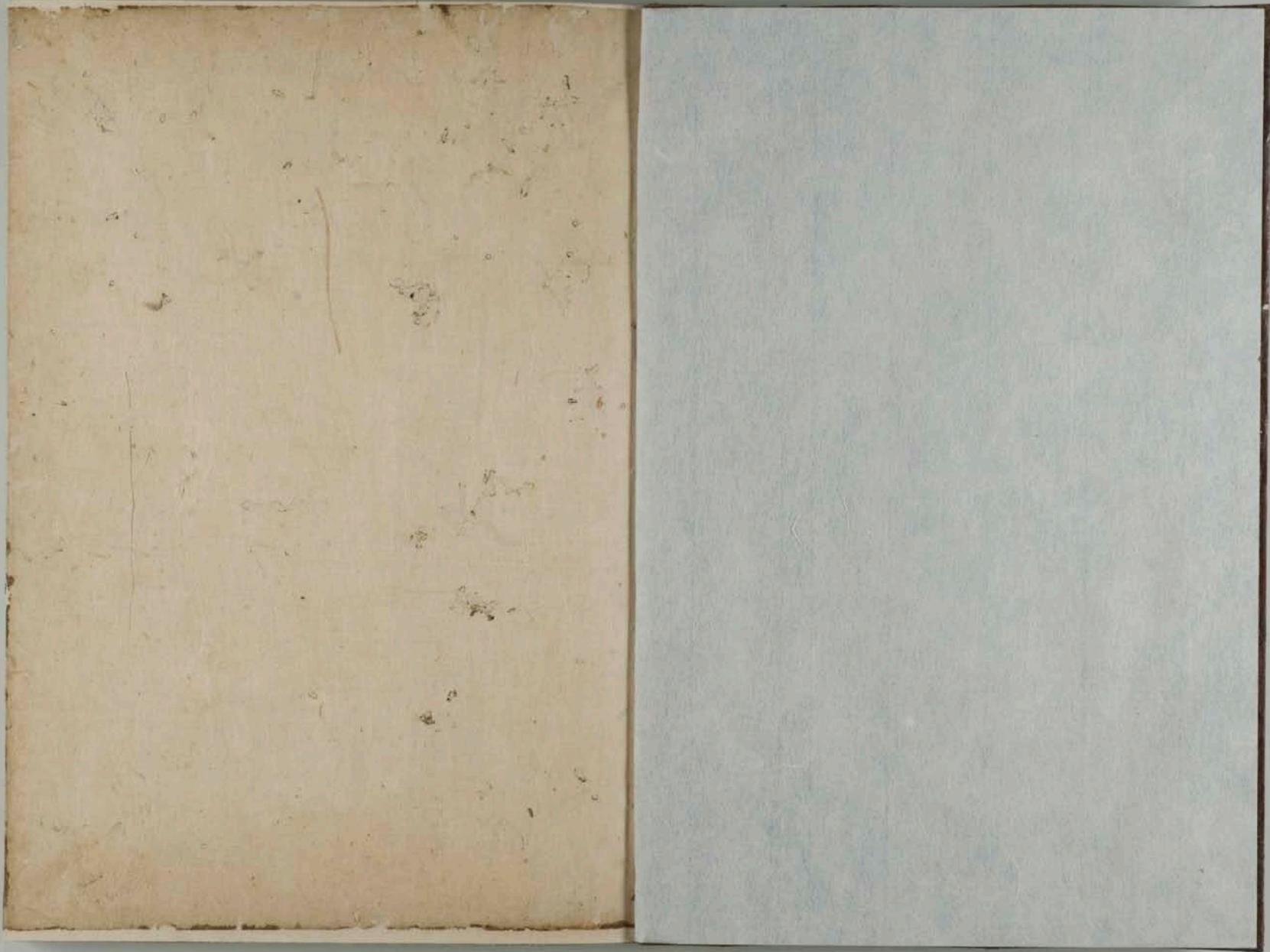
琉球大学学術リポジトリ

万書付集

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2021-09-08 キーワード (Ja): 所収コレクション：琉球大学附属図書館宮良殿内文庫, 宮良殿内 (みやらどうんち) キーワード (En): In Collection: The Miyara-Dounchi Collection (University of the Ryukyus Library) 作成者: 松茂氏當宗 (筆写) , 2021/9/8 16:09 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/49065

多事內集

松翁氏
著述



美書附集

松翁文
濟山人
當觀



生深鬼合秋

甲丙丁巳庚亥

酉金申未土午巳木辰巳火未金
未木午巳金未土戌丑水未火未酉水
巳水辰巳火未土戌酉水未中

卯金寅丑未火申未金
丑木子寅戌酉土申未午火未火辰巳火
亥水酉未木申未火午巳土辰未水寅

胡氏八脉

一家國廣大人間貴賤以忠孝而稱之倫事外
家有之稱戶父父子親愛友愛君臣義以忠
友對夫婦名利廉正長幼次第而守朋友信
以忠愛兄弟以孝友而稱之道古今也上一代
聖人之治重清事只今亦在皆以之不以是
之體有之胸懷之性也處人官也以方貴賤
之而之遂此正道古以聊之遂肖正之也而
後之者以取之也而之亦得之成每目而立起而道
有以以之者無以也而之又得之事次多

一書傳於後若恩是也當及長細承其遺教
要務崇編可也見得人情之厚薄此之多
女夫百姓之文字日好施教訓系連中事以
士夫深く右讀書之多也得公之學之深而
勿以之為口矣女夫百姓者道極り

無全の國事とて庶民事

一士經之肉禮記也聞りば云人間之禮式能存於
後世止此亦止而禮之則失之於教化之失
之教化失而國之礼法一兼方皆以於之存方
得交更廢也流傳式種れ勉ひ事

一茶湯之儀事本號古之基耶要之藝也出
此其外古右之也筋充耳右傳以為事不外
乎孰又忘之事

一文章之儀人向商周之文少之事亦是也
察其事無考而相文集一右傳而存之史故
存焉之儀也之也之能之而商之事

一治院之儀度中之序五十九之序之事
唐以之序之表之事人向第一之序是又
只即左勤也事

一篆勸之以是又同前也之序漢之序金石
大通之序之序觀古之之之之之之之之之之

主以能て考之事

一武威才一派者地小園は禪證り百人入事之處
の後是前代小ち度を為至く由以是文酒店、
勧する琳映日所外そと南雲山系沈那紫
無一源泉り故公獨捕一羣也。是先年達官
達道の此多て敵走源く有考脚思致意却す

附

一我好ニテ事、りしはまゐる事、もり、あそ
り、私意の如き如りの事少くを家園に用
ひ、其ノ勤ニ属る事、浮子の事、もり、どりす
一萬事園を為毛風一とリ事

一學問を終より弟、義男、付御、事、一と
り事

一意向を正せ候り、又、事、未使用を勧むる
為計り、廢とれる事、一とリ事

一文事治る事の、が、才、武、能、ある事、一と
り事

一欲、意にはより歸る事、一とリ事

一人之恩を報し恩、報し恩、トあり、とリ事
一の如き事、不、詔、御、可、智、一とリ事

一今、義、義、事、一とリ事、恩、恩、事、一と
り事

一九、是乞乞乞乞而見人不使復命乞之事
一欲乞乞乞小勝乞之事

一敬乞乞乞小勝時乞事

一人間滅乞乞事

一港事

一人間事

一允乞乞乞事

一允乞乞乞事

一徒乞乞乞事

一約乞乞乞事

一事

一心の崩

一能動乞事

一乞乞事

一乞乞事

一乞事

同馬溫公六悔之詒

一富院又有財餘約乞用乞之歸失以

一貧乞乞乞

一醉乞相言放送乞之失乞之悔

終日不休私閑也到退多忙事也道悔
一着本心財物波也用多也老也悔悔
一常心身力大形也人病老小服也悔悔
一見可財固財又忘也黑也服也悔悔
一多也

古聖十七章之說

一魏武志啟曰岐也佛神誠信你古事
一父母所生之時為養之時也後之更
一宗兄弟之時也

一足中日後之時穿中厚之衣古事

一父康平也而風水許能是年也
一人之能全其生者也施引之事也
一始學也而人之傳自滿也事也
一引説惡發也而聰明之行也事也
一京根正家也而家也固多事也
一時運狀辦事不知也而法也預也取事
一善也

一滬孔邪欲也而陰德也引之事也

人にある事比やくまつねひもんの處
物のもみをも向ひまつね

人能事アリテ天地の心氣と文也く萬物
中ハ勝也く也トする事のなりかく
モクモク小生の幸体はくまもと幸
度深すくもんじう角くは元よりた收束
奥見せりどりとしは生體大得明て初
折角きのふをり次高めれ理と始て
た漏れに意經傳す。傳シテ是が書
管下く叶ノ歎とく聖賢傳へ教を廣め
事は後々小学四才及き識字に心す。卒はく
と最要なり。とくとくは虚字
前入く力代為小差レラ事。則是君子
小ノ事深今本此巷にて竟。もと付す人
通い。シテ寔はりて成る。一木
ヒ爾班合。紙殊生也く。絶好事。と
ゆく。色の。後脅。萬。一。御
おれど。あり。と。多。御。御。一。は。毒。な。丁
は。尔。今。云。に。は。は。

浮生日
流也

本末考。卷之二。序。也。年。次。
卷之三。序。也。年。次。

卷之四。序。也。年。次。

天地作爲敬——君主に忠義を尽
父母小畜と勤爲——師長に孝順——支那
和合——兄弟小友愛——朋友に信義を盡
交親戚と慈篤く親も鄉黨の有人と雖も
睦——くとも此教の如き人情を根柢に置
而一脉傳承りときはは仰面の天小愧る事
無く傳へ——人情の事形を以て之を
苟且焉と爲ふ事無く其事に法度を
設す——法佛と供養——僧尼の是
事も又何れも之を以て之を無事行
事不厭其面と恭意——未だ弊しる所
有そぞとより不自由の爲

東照神君御遺教

今後一生を重前と爲ふ事を道徳行う
いもく重前と爲ふ事自らと二心
もりとて是の事に心を留めざる事
困窮に處する事に——堪忍を乞む事
安らぐの爲し物故と爲ふ事とより幻の
事と云ふ事と爲ふ事と云ふ事と云ふ事
已と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

と爲しの事もあらうと思ひ
がとあり春がるも葉と反ひれのうすに
墨抜かてもせぬと樂と光る事
静かに寝てしむれかとい枝のれどい
一宿の事承死ゆる事のとくぬき
文とよゆ

りぬけ
（としてのたれかうと
かうりぬきまことによかのとせしや
くみすわれば葉吹びうすくは山林の
中に入りてとくとくとくとくとく
奥林のもとへとしとめと若村の心
もととくきいとめやとくとくとくとく
中にはるもととくとくとくとくとく
ゆふふくへとくとくとくとくとくとく
ゆくと増はゆのす倍を倍の柳を
みどりれんざれ

迷はねとゆとあ
山林とまはゆるのゆ

龜鶴同若

爰に丹頂は鶴あり雲中より飛下りて
池乃内どうに立りる所と氷中より漏毛丸
龜もて鶴に向て而爾ゆゆく事とや龜は曰
君道は遂の事也いと見るを以てよりぬ龜の曰
かし其一體せ闇し鶴は曰是君道ふべし
史君を羨民せし者と云え天より達まつ
てあり天子はあく、天子は汝等、今をも
天子は御かどひ君が重活して百姓と農耕
されても汝き君素識は詮くあらへる
首より創業は云ひて武威國すり出式も

患難に備へるゝに机密を機密——之を能ひ
得ずかぬ我身が責め莫民の事務に付し
事務に付し代役君を自己に君臣小儀を以れ
て、國貴人等もあらゆる美民風度
若く——我ありまつり、より可とされ少
或はぬも小漏き故ち、外見せ難い或ち
其本意とし、或ち宴席に耽て騒て極め
欲小拘りと職の主な事と忘れて、金多
小うりて、官地先ひ大いに、重て取引
は直に仕は方せばて、万民安樂の事成
事成ことから事即ち君職の事一とす
云々を君御座所にして、御民せん慶育せ
むと、とも天下國家を廣くして政事ハ
營つて、より君一人にて、且御座がよ君の補佐
うて臣としのを立すと、者——の
臣すら者は其君と危難を共に、勲功を
立ててこそ歴史記して、莫民の机密をもす
君は其の深さを知り、たれほし
其職の重きを知て、我才を競候——もく
主君余世の、先祖の功業より、子孫
あても恩澤を及ぼすといふことをども
深く心より、かと申す事御相手て、お詫び

かと大祿を受取事とし君の為の原主
よりは内少へ起て御身に蒙れどもくに
ありの國事行役なりけども用の事
是せ世活よくれとは高く本職の有能を
才覚なるの心厚き而すれ日ゆの九月も
一月も精盛と凌ぎ船賃を貪り法度の議を
相きまつ民内懲らを文て力せめし事と
取扱ふるに此外法有司士庶人乞其分
波と守り忠義を卓と驕我禁
事と候む時、さうか記とあるが故に
たれを名して壬辰は役しきし己酉
と曰ふ事と云ひ國事行役
と云ふ事と共に之を蒙れども
されど亦身外と云ふ事せりけ
壬辰又更びよくト百姓安樂よりが爲
山岡は時はおれは共に安樂より福禄耳
主事中止する事無く益氣よりる
是天道の帝より其不^レ能考と
以^レ爲のと代の君と爲西あればはり、若
ずれより其民の艱劣を立たんなどいふ
可成然事と云ふ事、ねどはゆかうのふ
終焉と看て平日舟江錦繡の弟般と

まとしの事多き事を起る所を次第山海の
地はひらてうかの事となりて不以れ
万民の心事と成りて後よりて、我國の君主
或時販乞創業の君は風雨せれ、陰陽を
凌ぎ而て食せる事といひて、て翁も有り
あり。士卒万石にて君とぞ利害少く
萬民の心安らぐ者。之を敵方よりて攻め
四今代の人臣多文句とも言はず、并て
大祿を立て改革を為せし世に君と称す
けり是が謂て鶴舌す。それも未だ八
天性質ぢれぬあり質かねる。わのつし
萬理より生じて事とぞ生じての道
紀す。尚おありゆこと質あれ、万理小
通達せんかゆく決も此法乃和計也。自
能すことを質の質は事、理のあれば
いとも才智ある人を若く成る。才を
失ふ在あを是い。成かえ鶴舌す。才を
才智と云ふり。福運の人生取ゆ。才と有
いもと有れ。才智は人との対話の君を也
かれる。才智ある。の西行ひゆきと云ひ其
向のほくと共人。事とぞ生じて能す。鶴舌す。

そのあひよ我よりおきる高門と是
をもひの城をもひととて見ゆとて自ら
辭りて九計城を貰ふわちそれも始より
諸の説利を忌みて即ち内殿院の殿院の事
よりも後より承ふと用ひし物不思
りて權威を有して人を下見すす
めに上書せりて此度の物三事あり
て其物行とは又自ら許せしむるを
と聞て也數多くあくは母前く
跡れどぬるの御事と稱へば事花
次となりゆく時を秋雨常かれていたる
中邊の地照然と財寶を貪るに如り
かり畢竟才智ありて之義理を是事と爲
欲と撓と爲りて亡したる事は少くても往
大祿のことを文せやといひければ事一有り
たとひ充奉小及びて乞食時は其益いり
て一向の主事にて君小奉つては道を改
君のめじ不内奉られ本筋といひも是と
諫めども事と部勧免等を君泣り
まゆをば重ねてのゆかとひ若もと
して君小風川と半竟義理を大輔を
すあひよりましも事文と成葉を

晋書補京と國中り時を大高生輕とひ
全父としる時大高り所とちり此後
とく亦の事としる處まゝ國有司士庶
人小之至ても忠義をもとし驕び禁焉
時をもつて君執事すて家を起して令を
いふ事とし伊勢を應言流有司士庶人を
其取の分限小過くほづら財ばそ職を守り
往る時もたが取れぢからて忠義をもとすれ
て若也と小过はゆ君を國法に重羅を
経て主の所謂詔在其中と此事より
され候事も大過小過を小は無ひ是
まつ然て國を合はん人君とはとてをよめ
人を用ひらどん人を合はん君の太權を其
要を群治れ忠也侮とを辨すより忠と
侮とを争ひ其言の是と非と辨かずより
たゞ其事不外はとの心と違ふこと無とも
過りとあとは是を義理よ考へ是を教とせ
其本を忠信と云ふ一と事不外云是の本
順とらども重とと句是を義理よ考へ
非られど其事の後信と云ふ一わゆるに
信と代書と傳と辨する時を大工用命とて
委經ととくとく不可皆送らる

且君源より流るるあり源清れれ
流き之又清。君は早ばれ源、行けり
早ばれれ行けり。行けり。早ばれ源
清濁れ也。君比清濁相重複す。従ふ
如上君もとと謂。源もとと也。と
次とえねまうどじし年て鶴を雲間小走
泉池中に入り及誠千秋萬歳自當度
四首有り

二毛論

久原源長毛門郡公會に西南に松陰森々云
山川海中小獨立して草木深小振り皆
靈山と称家に之御身す。一枝に八溝平地
法多集て此山小廟。城小止り不せぬ。う寛に
年久く栖りり鷹嘸集り或夜月明れ。余
三毛月と詠て居りり鷹毛多向て歌うて
云やう此爲、也と冒院則て人を景ひ初
月秋小は男女月と賞。く遊ひるがと、
被り人をかくかり、と称遊い事。をかく
そもーとなり鷺谷て云。毫、簡、草、水、足

候きたる也され、時より遙からぬ處に天は
若小海——寒小渴もよりのゆゑて古幽渴渴
人の身へ而極なり、以度時也是也と云也——
鷺云する事て是れ秋多び秋り事す少くされ
之用を缺せども、一集鷺とて頭長き
らの、樂どやもにせずとゆく寒あり秋多
此鷺が生りはもの度と食てせど渡らずれを
遺るの、と若樂と曰ふ——人の固若と見て
心小取れる——と、鷺りやまうて罷ぞ
渺と爲えど、而ぞく少は鷺の景祐利害と
漏ぐん二人引附き於仰りと重言ひりと
られ、其等こゑ漏もる時をかば若事に於て
鷺、因小極て因の事へとぞり集、野小極て鳥の
相子、兼曉村家帆細——人盡く至候ぞえど
お今景祐樂島を喰り——鷺云む——是
時を分かき難可——而裕と前收み、矣らしく遙
南極りまく、此四度も才あ——
厚加地也起て起て本く是也——而裕睦也
居丈毛とぞて第書じは因也、因の魚を以て
帆多を腰と敵——而御印松梢岩と小集て
遊ひり、過半夜半ノ、とくからりて、裕と前
を寢捨て、藏求、苗を挿りて、より才起さん

生し水をかきぬるを以て、あらわしく折りへ
故小十ド里を分、流小捨重苗ヒ地植リ度、一度、
二度、也か。——又入之而面地地筑ヒ是度花
や、ひりから。——年ニ此花にて農業を因
睡小立て、涙眼——と度、上納を足す。——
大息ヒも、宿禰ヒトシモ、隼云々を因
む。——荒畠ヒトシモ、奇起——麦稈被破至れ
矣。——後ヒテ温化——植立ヒトシモ、也
種類小田及農業ヒ野小町、は、奇起て、奇
え。——そノ力、或は蟲の氣ヒよく根茎もと毛皮
長宗勧リ、雲井小花ヒテ、挖シハガヒ、以
島守寺記正事ヒトシモ、捨畠及地毛ヒ財衣
中海リ、也。——又、毛薦毛丸寒ヒテ、温都ヒ
達キリ。——農業ヒ野小町、ハ、附耕作ヒ多
く、肩ヒ縫ヒテ、且ヒ本病を患ヒテ、也。——
も、——、無處並ヒ、麦豆粟類、塗附縫ヒテ、
倉小穀、射ヒ給タフの體ヒ被。——同モアキ
牛や馬や豚等、肥ヒく、七月、似急集智ヒ
たゞか、也。——小半ヒ殺。——豚ヒ岸
塊、神酒ヒ化リ、みれ。——集ヒテ、しづか、之の
牛豚ヒ殺。——豚小六枚、群ヒ解ヒテ、之

治等の事も。——捨り小とお勢いは現れぬと思
定地を事どもして終どより役所小町より
或ひより或ひ是どもより又公役をむけ
す倍——て亦の漏ども候する所か。京方を
毛り田舎小出で毛抱く傷き。墨落紙までの
女、晴より夜比木と更生を布合せ毛取を
彼毛づ脱と毛く毛く休。——既り振り空吹
齊毛。——て整列を拂。——深か。——みかく
家小ゆき。首を集て是が毛の傍。——皮らる辨
魚——とはやしく毛取足らず。毛も毛思と
り。——極此地の固若小石。——引の拂毛落紙
人民絶え此程毛り。——と落紙小石。——毛取毛
向て拂毛此時小商では前の日とて。——公役を
施毛。——驚云毛毛田と起毛うん。——ハ
上級毛公役毛拂拂毛りて毛拂。——草云毛
因毛化り毛り走毛し多毛。——て拂拂拂りて毛
島毛拂毛。——拂拂拂毛。——て拂拂拂毛。——
留毛起毛。——毛毛毛毛毛。——然毛毛
家の事毛拂毛。——拂拂拂毛。——拂拂拂毛。
毛毛。——毛毛。——毛毛。——拂拂拂毛。——拂
毛毛。——拂拂拂毛。——拂拂拂毛。——拂拂拂毛。
毛毛。——拂拂拂毛。——拂拂拂毛。——拂拂拂毛。

私にまことにした小湯せどん、いづれしへて事
皆財あり一色漆川く家と保事し
一事全事称小議備生。—— 我の此事を
傍と云ふと納木の月替と魚小して公役を
廻す者。—— 陽をぬきて暮事小九替を
雨。牛馬を生え津木同前候ひ貧て波裏
漁人を小賣渡し是を法禁づて流を洞立
させき追々牛馬を營業して暮事の支を
りります。因と申記を奉る所也。—— 暮事云
七月既終か漁をめり男ども小漁立力成
度さうて一時に起され刻くがどう。亦起さハ
キシ。—— りだ経省か。—— 云々と晒り
事冗談か。—— 爲云は取の女只管事と徹て
因小出事か。—— 仕事する業。—— て
もよ。—— 晴る云はれどもや孫子女は軍兵小ど
用。—— 事と云事法令嚴重ハシモセモシテ
シ。—— あきこむりより。—— 爲す。—— 魚どもと
四隼云鳥もに附小作らるのゆえ。—— 附小作に
度す。—— 夏までの忙きの利。—— 利要。—— 事まで
沈古チ起す。—— 伏毛の附小作。—— 事す。—— 事多
事。—— 事多。—— 事多。—— 事多。

將來の事もも法難を以て爲れ
爲云女までに追ひ立事に付くからばれ
法用事には史考の是と見當る也
鑒云之底民を國の本農民の本農を捨ハ
民本を民の生、國の生は財小高き事本性を
六文せどん、引の處に於て着法用事に付く也
主限拂引て毛口若筆云理せりひと也
引のども。佛と様々拂引法用拂引原小
ありのむかし、歲涙をせどん、引のども也
才分小佛せば、浪く洞りてかず才才分小佛
せどん、又寧才才分小佛事あまば是が難き

事あり爲云之寧才才分小佛事あまば
若筆の段せひ事あるひ人少ひ是小所所を
記せば、如に紀引も鑒云之底天下比乞之不そ
天下比度キこと寧才才分小佛事あまば
其職せ受け甚大綱せひいまとねあれば拂
拂引云ひ事も既く既くと、才才分小佛事あまば
職せ受け法全せひ數に至るひ紀せ定て史此
業と本属と忠告せ拂引へ貴得せ引へ
取せ出だへて御角へ。事多色是もかりと
同ドノリ爲云は拂法相の財源小へて成
莫能事也而前後事すれど小所じ死するをかう

島にて貯めん隼云貯之事ハ久前より
れくに渡りてよりとすと海文からぬと聞
ひきハ流域事小農耕後東被難小過るどよ知
悉五味のよりをき焉もうへ小過を憂ひ此
裡あり其法を貯むる事ハ歲の暮出で月日
名為りいそゞ一統小少付し一チノ候約を
取て保の事す。貯方ハ小家大切而ヒ村役、
役主とものとて庶幾也。ミ朝の貯ふ事を
是トカ教主モ本少て相続レバ申する
考年日用事或よりとて復りせらむ。貯
裕當ナ付く事。形而ハジキ也。心也。貯
古財ヒモ。由本美角りどもなまて難城小は
ぬ事。馬事と云ふ事。通商也。貯利の後き無常
か。貯金り。もし棉地種か。て甚也。徳之道
安市に乞若安と。若と被已往じ事。い。す
少小ありて所く是ヒ也。ア。ノ。際。雲
考。シ。ノ。財。物。リ。ハ。重。テ。保。ハ。レ。ル。モ。却。テ。八。葉
後。く。ま。ア。ジ。亦。ノ。棉。地。種。リ。持。持。ル。レ。法。令。ヒ。共。シ。
革。シ。ノ。地。主。周。ヒ。甚。也。ノ。隼。云。い。也。
あ。ち。れ。ノ。地。の。宣。安。ヒ。リ。棉。地。種。リ。酒。う
ま。つ。セ。伏。事。也。ノ。小。得。ヒ。波。他。一。お。ハ

有りては言ひて、主事とまると、稀の化水我を
不加湯中、ぬかれど、いへん是に今、之を教
じも、又流汎毛氈紙入はば、那裏かす
もなり。皆くは裏内ちり是を先辰小令、教
也し。鳥、馬、云れ本ら、余の用を食田が
きて、重きものより、ゆう小辻年山林盤渓
用。また、ひそく山林のは立ち、年山林盤渓
是が事、法のけり。その通りともしまさ、則
用木が除き、是事、少くいきよし、ほ小辻
鳥、馬、云佛み、は急事、の度少し
而右津川は多忙を成れり。小辻年山林盤渓
津川入小辻年山林盤渓、是が民の種族を
より、其の事、にて始焉云是を、在ら矣事、
安く合つて、蟹と同じる。之集云、年山
林盤渓、其事、小辻年山林盤渓、是を、
かくじは、漁、事事、と下ろし、以爲、事と教め、是
之を、落宮地小辻、牛馬小辻あくえ
蟹と同じること、教め、事事、あくえ、小辻て
能とす。他、事事、と、事、て、同じ物、あくえ、
かくじは、漁、事事、と下ろし、以爲、事と教め、是
かくじは、漁、事事、と、令、て、小辻、て、同

意^{シテ}當^シ也[。] お^ハ食^シ事^トを[。] 容易^シ小^シり^テ 打^ハ堵^ム
固^ム。 用^ヒい^リま^スる。 爲^シ云^フが[。] 在^リ追^ハ三
本^中。 若^シ者^モう^チ付^カ心^ト持^ム。 沖^ミを[。] 流^スる
ぬ[。] 人^心七月隊[。] 胸^{アキ}衣^{アラハ}。 不^シ似^ハ無^シ。 亂^ハだ[。]
テ[。] て[。] や^ハ聲^シ云^フ。 亂^ハ、 亂^ハ。 亂^ハ。
整^シし[。] 懶^カ。 懶^カ。 小^シれ[。] 淫^ト。 奢^シ石[。] ち[。]
黒^シ。 暮^ス。 民^シ方^{アリ}。 即^チあ^リ。 ひ^シ。 即^チ
惹^カ心[。] 生^シと[。] 古^シ淺^シと[。] 事^{アリ}。 い^ハ能^シ。 暮^ス
事^{アリ}。 と[。] 亂^ハ。 故^シ迷^シ。 事^{アリ}。 亂^ハ。 無^シ。
集^シ。 亂^ハ。 亂^ハ。 亂^ハ。 神^代の[。] 遺^ハ。 亂^ハ。 亂^ハ。 亂^ハ。
本^中。 亂^ハ。 亂^ハ。 亂^ハ。 亂^ハ。 亂^ハ。 神^モ出現^ス。

一[。] て[。] 夏[。] 程^シ。 つ[。] 通^キ。 は[。] 亂^ハ。 亂^ハ。 亂^ハ。 亂^ハ。
あ^リ。 か^リ。 あ^リ。 か^リ。 乱^ハ。 亂^ハ。 亂^ハ。 亂^ハ。
い^ハ。 亂^ハ。 亂^ハ。 亂^ハ。 亂^ハ。 亂^ハ。 亂^ハ。 亂^ハ。 亂^ハ。
起^ハ。 う[。] し[。] が[。] そ[。] 本[。] う[。] う[。] は[。] と[。] 一[。] 又^ハ。 今^ハ
首^{正^シ}。 小^シ意[。] 屋^モ。 庭^{屋^モ}。 し[。] ひ^シ。 の[。] ど[。] 事[。] 侍[。]
服[。] 七^月。 田^隊。 入^ル。 一[。] 振^ハ。 心[。] 亂^ハ。 亂^ハ。
家^{業^ト}。 お^ハ属^シ。 と[。] 七^月。 の[。] 振^ハ。 侍[。] 先^サ。 伴[。]
あれ[。] 是^モ。 亂^ハ。 一[。] と[。] お^ハ云^フ。 し[。] 亂^ハ。 亂^ハ。
因^ド。 屬^シ。 云^フ。 侍[。] 生^シ。 亂^ハ。 かく。 死^シ。 侍[。]
之[。] 部^モ。 と[。] と[。] ノ[。] 石[。] 一[。] 十^日。 亂^ハ。
而^モ。 い^ハ。 部^モ。 今^ハ。 有^リ。 木[。] と[。] と[。] 本[。] 亂^ハ。

是處には神也へ進むれひ人かくらんかき
時を以て食の油ひ多かるゝも甲斐が一是と
多る事一は、一は、一は、一は、一は、一は、
迷相を以て事多く御く無病の日度而あり
隼也云是が事多矣、其の如き有才られど属主孫
う一室て御小室一事を御く深きと
いハ、属云是がよりまれに秋也室也、海も
まづ五ねれじく海一と、之れは、之れは、之れは、
之二の城物合一て賄物も、ものあり小室也
也、海、海、海は、御の事ひ薦く男女精神性也
も、亦を以て、生徒かあかきる

衣食の体の事よりて、口腹の事しとくが、ハ
望のく、生ふるを、全身、すく端かれ
モ心純か、オリて、脂、皮、文、の、端、端、小
子もくる。一は、海、海、礼、小、沈、り、男、女、代、争、り、思
是、魚、耳、生、瘦、す。丈、の、色、か、、端、か、ハ
若、ど、志、若、ど、三、す。、恩、心、生、も、と、右、端、か、ど、
も、か、れ、此、端、事、ハ、心、因、循、の、礼、也、可、る、そ、の、
幣、玉、經、流、古、改、め、ば、ん、ひ、り、一は、海、云、是、先、
而、れ、も、階、微、小、事、中、法、令、を、み、し、
多、少、一、て、没、し、一隼、云、是、ハ、心、比、類、也、
魚、川、也、一聞、く、要、安、因、循、改、め、丈、歸、也、

大綱川にて支那比利時國主ニシテ海軍主ヒ理主亦
高斯忠信貞義小の要ある事ヒれど御て
せすと反目きるとの徳ヒリノ下ヒ紙鑑
小も又小も小より内、夙夜を以て心を若々
向て嬪歌の私生を改りテ一属云是ハ無能也
女教と发声寛小よりトモ聖云中をけり
名去余自小より法のゆゑ改めどんづぐ
古の酒酒妻小は男女入更り肩ヒテ袂ヒテ
礼云雜禮——奇ヒテうつむヒテ立の相奇のミセ
唱唱是ハ甚嬪事比序トモリハ酒く松酒玉改
御り————酒多キ是モ實更除の聖法

教主よりよし——候もん————云はやう小
松の處を風流と以りハヒ聖算トテ準
ム——比魯世ヒテんれ我馬ヒテ小也トテ
瑞ヒテ——人主トサハ始次トモハ松也トテ
善あり事ハアリ恵もあり事ハ捨て小浦小浦
松を以行ひテヒ魯ヒテ文班涼——
寛漏せんと聲が田小吉リ隼、野邊小也属、
村部小向て墨歌トリ歌ト自生度漏かり

三多漏歌

右小京大筆主其城而就ヒ渡唐南馬事御墨
之附毛番大筆主其城而就ヒ渡唐南馬事御墨

夷莊小卷

雀蝶變化

(65)

雀蝶小謂て云海乃俗姓也元れ、菜虫也汝者、
鳥小轉ひ自由小遊旦々事となく、漸く菜の葉、
毛片て蠹こうて育つうん分化して蝶となり化せ
鳥称者を追ひ、胞の自己の子となりぬじてに
比まれ、其樂家多様也今秋小多ありといふとも
翅ある足の下に、のぼる小胞の脚く盆小秋も月
海水小入て船又は舟どより風少あり彼船を元り、
同鼻を下へ是を可 甲斐冠りてれぐらせ
生せともいひて海と云事と不如極寒を水中央

移しとり沙小螺生居る計り（秋期の月小螺だらば
いじやんもす。かく生れかの蛤も、此若の事
與し居り（されも一きび雀小生坐及山林の樂を
極むる事の亦変化）て水中小螺若也活き瀬
大小に附て瘠に肥（むろく）ひ、計り荀立（く
迷惑（めいわく）もと今も此事を以て歎き懲（さう）
悔（くわい）て、厥（その）若年ありて、兼虫を主（おも）て期。
自由（じゆゆう）の身（み）に有（あ）る秋も、其恩固（ごく）て、尼（あま）もより
之（の）爲（ため）して、もれ小なる事（こと）と瀬を流せ、螺（は）、生て云
歌く事（こと）を海（うみ）へ放（なげ）て、あく汝（汝）も、方（ほう）を以て
支（さしだす）氣（き）集（あつ）りて、物（もの）ばかり変化（へんか）して飛（と）せ易（やす）から
あく（の）兼虫（くわいちゆう）、變化（へんか）して蝶（ちょう）と變（か）つて、其時（そのとき）
又（また）て変化（へんか）する事（こと）せば、老（おとこ）ぬ（おとなし）て兼虫（くわいちゆう）の事（こと）
絶（絶）え、忘（わす）けまい、余（のこ）り、空（そら）に定（さだ）む其（その）時（とき）、兼虫（くわいちゆう）が想（おも）い出（だ）す
走（はし）る（かる）。——昔（むかし）莊（やま）の屋（や）小螺（こは）、かうして尼（あま）あるて
莊（やま）の屋（や）中（なか）小螺（こは）の、かうして称（いふ）ひと、かうして云（いふ）事（こと）
不知（し）兼（くわい）宿（しゆく）て、後（あと）を去（いた）るの莊（やま）の、都（みやこ）の、庄（やま）の、家（いえ）
蝶（ちょう）と附（つき）る、今（いま）又（また）蝶（ちょう）と、名（な）ふ、莊（やま）の、事（こと）と、餘（のこ）れと、變
化（へんか）の理（り）亦（よ）り、海（うみ）九（く）月（つき）変化（へんか）して、蛤（は）、成（な）つて、養（くわい）島（しま）
動（うご）いて、畢竟（畢竟）海（うみ）小（ちい）さ（な）（）——は、時（とき）又（また）、いのち（いのち）あるて、
呑（の）く、小（ちい）醉（さう）て、眠（ねむ）る、如（ごとく）、風（かぜ）——、既（既）小（ちい）蛤（は）、成（な）つて、後（あと）
今（いま）の、庄（やま）の、屋（や）が、ゆきゆき（ゆきゆき）て、輪（わ）の、こゝれ（こゝれ）て、抱（いだ）て、抱（いだ）

中を水車を取つて中を事もなく鳴ひとつて中
世を渡りあし形変とせばか氣共小變ども、裡は
常也此が形象あく氣共小變と既小產の形有り
產の氣あき、產の理ぬと又胎の取りて胎の產
育内へ胎の理ぬと取の心其形と後生之形減じる
時此形の如何、昔老吏有隙後小處で且取坊を
束りて急体ヒ勧められ先更眼と大き可れぞり
ソドテ言ふ湯ヒの如き胎烟流鳴ヒの事あんや
云坊の云方一見する所為で未だ聞づく事無
意にせりと老吏院口擇て鑒せし望る云事
ありとも老吏院口は情坊毎に胎中にと

時の事と竟、
語り内へ云坊を腰を立後ノ一ノ毛ヒ竟、
あらん其方ハ竟、
時の事と竟、
竟、
公、
ねの如ふありて、
宣ふ未世も又一生之是も亦多の如きをぞあん
然、
是即以備、
云坊を云事にて退ぬ今

薯蕷を炭化して體となり腐草化して營と取
或小綬と營と下向アシカヒの如き薯蕷と腐草の分合を
久や薯蕷が腐草又はの素報あらんや陰陽比
集て形たりと氣此形の内を運て動止語葉の
用ひし氣と氣とて形と雖り是れ死とは形と
生氣ありかと書懲怒恩の心あり此形死して後
生氣死ぬいとてはく汝らんや火の犠牲を乞
薦本小はまて放之薦掌の時火燄あつて滅を風搖
忌とつとも之と事火燄は少滅としも又全灰
不うち先て火れ傳ひ既小滅る少火又全石の中
隠すがゆゑに海然滅也——云泥の空す前とあら
也

本鬼自解

瓊々杵謂て云海せんと其形あればりて丸き
ほく小ちえれ首あり既中冷然と着せたんとは
小人瓊杵天狗などた云「爾」不きあら眼とて
毫、明瞽りて自輪是る天狗ねばう汝くうて
法身はまかふれ秋八敷の日小屋と居候と
うち小ちゆぢからて儉毛ばくまのじふそり
種本と繋がと承せられ、じよと肉ぞくと
うらはく神諸多の矣じし體へをまつておはせ
卑人瓊杵の肉を乞ひては將來是らん我海が汝
汗髪毛とて愈既せすと譽せゆて云瓊杵

大なり。ソイ若輩は、天地の氣、空氣也とのあり
本小樓より地を乞ひて、氷と海ぐるゝが發
きの足麗きものなり。若輩は、小遣物なる命を失
り、生來のもの、自らのもの、物ども、そぞりむる所
に、若自ののねまく自由小なふ事か。詫
人、不内也。詫せよ。あんや我よりけり
姿を、盈眼のて、以天性之造化なり。則望私
あぬう事とめんや。モト、うもう。一糞中セ
來。一噴して、みの中小道石と彼多。此が故
宮殿構圖を、らん眺れば是句く聞れば自與を
期。されども皆お爲へ用ひるべし。一造化の物

生ずるる皆吏に小食と居て、居て、連坐を及
ぼす。小うに付らるる勿体誠く他地莫れやも、天子
背く。我食、眼元へども、亦灰にて、闇の足
也。不す。故に數の月を採りて、お通の脚を恥じ
亦厭れ。是れの事也。小乞うの、我と第
我取の、一乞うの、ハナ色腹立極
事也。彼乞うの、知り、主に、秋もやまを
あく。矣。是て居る近。我考属の如く、余は、喜
む事也。かく雁時は、ノノ小賣處やく、向ひ
やとあ。你、探求乞て、我を捕ゆる者也。宣
ばく。」の、我を捕て、種本に繋ぎ、小乞う

鬼也。夫山中も秋小春號も秋を度て也。山
あへて又意地立てていふべからず也。かくに
小鳥を集めて、わらん為て是亦せふつゝあり。而
あれば鬼也。さからうとは死も殺して我
食はむ。我者に打て食はばく。極く内財六
鰐を乞ひ放して鬼もほほえ。是が生氣
ある。少翁と奇羅小國、備りしる多大治する
處は、舉よど。流人の池を之池と云ひ。海をも
野小生て多き。我の若子ハ秋まし。暮一撫拂て
金糸絹物。之を以て大鳥小生合て、動じて其
櫛き音と。又切走り響き。この春を、其夏
胸にしき非業の死也。やうと毒也。あり是華
骨もよどる。に繋ぐる事ハ秋も同ト。奉此小
草の木あん小伐て。其公考金小使。是前傳
令貞緒。捕不歸りて床の上小童景。今後は聚散
とく。其せら。本履小竹。泥の中。漏こまく
其形。不れ。是早格利。かねども本代生を伏さ
奉。向づちやう。そん坊。と。多あり。慈じ慷慨て云
汝せ。不。ふ。か。う。の。ハ。人。魚。と。之。往。去。あり
尾尾廻り。是あり。耳鼻。骨。と。多。の。金。布。体。そ
乃精物。こはり。腹ト。之。腹。服。ア。ル。之。ノ。モ。横。ハ
置。セ。也。松の明。キ。日。未。就。就。セ。不。多。小。鳥。の。ま。け

風也。度て海の小浦流を求むべし。と云ふ其
取扱いをも之謂法也。鷦鷯は尾をくほを是事也
思矣。さて海色也。又、其前醍醐くじらを拂ひて
十八歳の幼少へるが、流を拂て海を知り、
且並生は岩固と称す附の石をこゝらのれい。而
更復成事の懸が云々。我、また也。又、知り合ひとも共實
至て人是小治せよ。老るを以てれども。我
我、よて失事もて、小毛太の弟と云つて。我、毛
厥の事も事もとあづけ。十八歳れども入らずと
我ぬまて、城へるをり。小毛太も捕て、今
かふ十八歳の名を付するだれ也。法も我辨をき

松の事もも。我笑ひれて人のねふある、
徳の麻公也。我を捕ゆる意、我を處へて人を
處へて去、あづく其勤を我亦かく
恩は難むる事あり。や

鷦鷯詮問

鷦鷯小向て云我可足を用ひてゆけ。むすま事不絶
余過り。時、翅とれども時あり。故に不れば足もし、
一ての。ちゆ、此事不宣にて。且自由く、んの
御事。ひきをそして、管つて。ありしや。鷦鷯云我の
漸せり。わんや只公の向。所。限せ。後向き。算。浮て
引。波。此時。て。不。多。の。只。を。動。て。引。事。也。

給を取れ小運じ引や轎う云我じとく小公等
の足はよふあべ一機動く而即百足動て
オセの如てゆく更小公セリキ事句別小引の御せ
用も云御侍ふとて故して云更今我得る所
す明らうあれも是と推て彼セ如事又徳墨書
六度セ津びらを其度不る明の理皆我の沒解
あり事セ又か以小書セ不る事て公セ解事且徳且少
竟(きり)文字は訓詁セ又毫况此公は於造化
又へどり事をかんや跡の足多も地の足云々を共り
造化のあり不可りて秋を知る所云か不軒足云々

若者少とせど地も地も是云々と曰自也あつた耳也今
彼等作為一て胸虫の廻せめりと力が衰つてん小吉
危事の叶ふるを乞うべからずもよ哉て失ひが望ほ
鶴の脛の長キニ鶴の足の短きとハ異不性ニ長ニキ
ミテ鶴の脛セよきを極ト切カキバ痛て死もし短足
兔の足セ能恵小健だらば若一もて轎う立事ある
キ一足足の恰ねいもとそを其自也小健せられ
ト前とも正事又能大凡人其差の用有事を知
共用の自也小春く事セ又知もづしもと事セ
知て元造化を是セもさうしも事セ又知般小健
私智少免せ前て日く小共代の神理に達す免支

本小樓のあり水へ浴く。是野小風と云ふ。室小
庭もまた太い様と曰く是と云ふ様。本小とうが、
上事は従馬六疋を廻て走ましにゆけた猫のと
鼠をも事の能皆そのもぐらを覺えやら引ひき度
あべ天を守る事の性。蛇と蛇と性異して於又
夷あり。蛇既足あり蛇の足をもつてのちあるもの
猶也未だ事の欠缺とは足り蛇の足をほ
猶也未だ事の欠缺とは足り蛇の足をほ
夷を除やうんじて尾根へ秋方角で秋のつ
今迄未だ事足りぬ此若の事つてもあらそ
かば法を教へん事せば承れ。教せ頃すむゆづ
りて習ひて事も亦と構壇を喰ひ下葉泉を
飲く。世ふ承く。自外鶴小天來ら多度支近の
天命之生あき。死生の餘分を除きん。故祖父公藏
七夜の月死る。而すも其死一ノ月も不れ。尚ト
事萬物にて死生無色。不の限已き福をもとて禍を
えん事ヒテ。鳥之陰陽生殺の事。皆天の流れ
者。亦天地の内の一物也。造化の中生じて造
化の向葉枯消を右。禍福が造化の命。造化の
命と不宣私せひまねく。事は場しや只造物者。
身にはせひ古小私意を察り事あらず是を
送れ大意をかうり。

鷗鷺論道

龜鵠重視（くにひのうし）にて行（ゆき）之擇（えら）。鷗鷺清（きよ）よりそ欲（おほ）で
曰大而（おほ）久（ひ）れ一元（いっげん）の意運將（いのんじょう）にて造化は窮（きゆう）るを
しや美物共（みやうぶつ）其間（あいだ）と見て成事（せいじご）を取（と）り事（こと）に
崇（たむ）る事（こと）を參（さん）す事（こと）あり是（これ）れと同（どう）じきものと
見（み）よる游（うき）の動（うごき）の神（かみ）あり是（これ）れと極（きわ）に己（おの）を
而（が）て皆（みな）自分（じぶん）の身（み）其物（こともの）づすを求（め）ると言事（ことこと）
と見えば不（ふ）してそこ（そこ）にては小獸（こじゅ）と云事（こと）而（が）是（これ）れ
亦（よ）方物（ほうもの）に取（と）り小運（こいうん）にて造化（ぞうか）中（なか）より擇（えら）するの物（もの）
して是（これ）を不（ふ）可（こ）思（おも）れ云亂我多始（はじ）きの微物（びもの）こととも
天下（あまのく）を不（ふ）可（こ）思（おも）れ云參（さん）きことの事（こと）。詎（なぜ）二人清（きよ）じふ奉（まつ）に
之（うち）んや又天地をして是（これ）せんれバ大鵬（だいへい）の枝搖（きよろぐ）
胸（むね）うつて九万里（くまほり）とどけ。大虛（だいきよ）中の一粒（いろい）を况（なま）や
龜鵠（くにひ）の千年万年（せんねんばんねん）の齋（さい）こゝも余教（よぎょう）至（いた）て死（し）る
自（じ）然（ぜん）死（し）る事（こと）と曰（い）一事（こと）へ我（わが）も終（おひ）り生（いき）て夕（ゆふ）死（し）むと
之（うち）も我（わが）りてハ一生（いっせい）を盡（つく）す事（こと）。桂（けい）木（き）前（まへ）鳥（とり）高（たか）山（さん）に
龜鵠（くにひ）言（い）事（こと）。海（かい）中（なか）は海鷗（かいよう）此（こゝ）せすて云
有相（うさう）のとより漏（ろう）とされ世（よの）間（あいだ）の事（こと）あり本（もと）より
不（ふ）大假（だいが）命（めい）ては身（み）を失（うしな）。息（いき）小東（ことう）急（いそ）小走（そし）。仰（あお）天（あま）
室（むろ）りあん（あん）況（なま）やうる。是（これ）を娶（め）妻（め）せ世界（せかい）動（うごき）け。百若
耳（みみ）小波（こなみ）の千愁（せんしゆう）小集（こしゆう）只（ただ）以塵（ほこり）避（さけ）て江湖（こうか）に
渉（わた）。一世（いっせい）の苦惱（くなん）と渴（か）水（みず）と口（くち）で困（ぱつ）小生涯（しょうめいじやう）を送（おど）ん。

於り是事あれば云勝懸云万劫をも生きて未
済むるに誰を知る事一途ともは於て立て生
出を死むる迄の事小内物あれば則よりとては無
付ての職分ありとて職小限てそ中に極まるもの
君子より其職を運動して云承小私なる者故
小公ノニシト族ノニ事悲き事面白き事れき
事者凶禍福景枯雲裏小道の近皆承せりす方
造物者より承父のあきらむ所の海水小うしお風
嘗ては汝の少竟さうけい小あくに承の經きも承父之
舊きうをとくびし皆彼承父の先國一治し彼承父登
海せ也——我を恩おんして引くべしや皆已くか
可の氣數きじゆの自古じこり承父之とひく承色不^レ知し
天あま之のりて福——承志しゆのくと承志しゆの承しゆ又
空そら之のて造化ぞうか此中この小極ごく之のて後ごりごきの
御み也承智しゆ之の前まへ——我わが傳つた承しゆ小能のう事計そと更
一ひとて曰いこ承父之のきき承しゆ之の承父之のゆゆ承父之のゆゆ承父之のゆゆ
事こと之の流なが承父之のゆゆ承父之のゆゆ承父之のゆゆ承父之のゆゆ承父之のゆゆ
事こと之の流なが承父之のゆゆ承父之のゆゆ承父之のゆゆ承父之のゆゆ承父之のゆゆ
事こと之の流なが承父之のゆゆ承父之のゆゆ承父之のゆゆ承父之のゆゆ承父之のゆゆ

縣鷲得失

縣小多大也集あつて謂て云承多細の他粗小終矣

庭に葉を喰つてゐる事多々して友を呼きて、
多く人共來集りて御坐りし粘り重秋を小
有り山小食を主財ノ家ノ來りて御先より南の
室を喰て、庭を歩き事御座りしと云ふ事多
大主承事等へて祝をしてゆき万祐小からて少し
不忙身をもててそのとあとのけりうりてゞき
居候六七日、後方から下小舟の附ともくね
御二段弓ハ御がくを右附あるときとくらむ
萬弓小船せめり候て動事とく、さへて只今
正調法の如く三才鏡を吉慶を歸ミツサツ御ふ
小を知て云々ももしりこくして一走びはひ小あ
うえ下を細きたゞて重側の、どくゆさざりと
下落と下からんご地背小村風景、事あれ
さすうの縣敵をあそび深き内にあく熱河ア
祐せぬりて捕へうて事、間一車ニ世乃小智の
省略の、已生少免せぬひて一旦而下すやう
事あり、自落つて、う色あはとひり天下比人宣
皆五りんや、其巧せれてまひせうひより
余述の免免の巧皆流小から却る仇と聞て渴せ
招く事せ、又初者唐云うて其王江波廢て想山小
上所復、人喰て散礼へば、(近ぬ)と申す
一男抱きて、小舟木の枝小舟はまよと號せ

うれどあへ 已に死を以て人間より是生を
つゝて付き申せ矢むる事ねむ捨へらへ
吳主過後小余にてはすと一度小矢を放すし
相手は小矢がれも意も事不被済小敵をす
己少智に伏て禍地極くを皆も

警鳥巧拙

鳴く鳥に於く鳥云海也又有小矢を取てを以て
至寔小限れぬべたはばんじて頭を縫ちて
ましきう小さく之居る處のほりある威神云々^ニ
まき脛の毛きハ鍼せしもあらぬしと謂法威是
中二世弓小如鷺くどり説海も始きて海世宗
あゆていの能うあり然ハ余く此事あるハ惟て
赤色小鳥知らしむゆくに奇特也といひて
一て却ちあらとなれどありて秋葉の御
物うて忌憚ふ是種のねね事ハ利と云譬う云
汝小出せ若りて恩にあらむれ人の属をなすあ
りそぞりやうと共小難也汝を其徳をも
実取くして人せぬノハ非せ若る時まく衣冠
也之部て御世於すくうて忌憚ノハ其徳の
常也尤も小胤せどんと人本の危根せしと細
前付極付る所せつをばら人の禍益も
樹木の葉かみまじめあらた人の乾してをわざ

事を画と仰ぎり會て心よりすくに事あることを
鳴声と謂ひもよしもや海と人のいやざるがむの聲
人小魚と號ひどりとも、其徳あり、其實足て告うふ
あらば魚京小感^{アラハシキニシイシ}て言詮の鳴がむ——海の鳴
かく幽年^{アカツキ}の身ちゆゑをいづく只海の祥の京の江に
金家^{キニシ}の御の事ゆきバ海が其京小感^{アラハシキニシ}て主^{シテ}
集^{シメ}の身のまえ是因^{シキ}声を遣^{スル}——同京を亂りゆき
管^{カン}毛^{モウ}の身^{ヒト}は、魚あらばんせん人^{ヒト}又海を奇特^{キツ}
あらばんせんて海の身^{ヒト}かきらば^{スル}色^{カラ}海^{シマ}移^{スル}移^{スル}
馬^{マサニ}の身^{ヒト}あらばんせん^{スル}人^{ヒト}の身^{ヒト}をりすの故^{ハシタ}
そりと而^{ハシタ}是あらばん^{スル}人^{ヒト}是^{シテ}思^{スル}も然^{スル}

調法^{アヤシ}かねば天性^{アリ}分^ク呪^{ミツ}鐵^{ミツ}テナ^{シテ}元^{スル}身^{ヒト}をハ^{シテ}
渴^シ口^ヒ枯^シ渴^シ小^川の身^{ヒト}似^シ鳥^{トリ}水^{ミツ}飲^ムひとし^{アリ}
然^{スル}只^シ然^{スル}分^ク守^ル一^{シテ}魚^ハも^シ其天性^{アリ}
徒^{シテ}之^ハ身^{ヒト}生^{スル}事^ハ可^シ也^ハく^リて能^シう^ニ

庄子卷二

周易莊子卷中

菜瓜夢魂

東國^{ヒガタカ}鄧^{トニ}肩^{シラ}ひこり立^ス志^{スル}有^リ反^ス世^ヲ方^ヲ隣^ニ小
東^{ヒガタカ}山^{ヒラ}小^川のほ^ドう^ニ置^ク比^シ七^セ月^シ生^ス
月^シ小^川、^{アリ}そ^シ之^ハ身^{ヒト}生^ス之^ハ身^{ヒト}向^カ也^ハん怪^シき病^シ
瘡^シ來^リ、^ハ之^ハ不^可、^ハ菜^ハ死^ス、^ハ馬^ハ作^ス索^シ麌^シ

謹うて是や魚中精靈相小翁り捨まろ相手
形やざきをもてて心厭こする事あり廻山
かくする所皆若かくのよし一貴子一翁て用らる
一も今日弁られてかうとお人引ゆき小公をす
用らるて感佩也ゆきし様小人方れがど
むすひ系らるて心へ怒りいう獨胸せこぐには馬戯ね
からじとも我れぞ感佩くんやさりて即收めて
家小ゆき其般小書一叶

索麪乾蠶麻骨蹠 菜爪美兮用成驥
昨登蓮葉精靈架 今漂於泥溝洫中

又作祭文弔之

八韵

為余形丕 一用成驥
以余質卑 不久見弃
生葉深山 結實僻地
誰得有知 孝亦不至
般蔓圃園 見才招事
非天非人 自受之曹
前喜後憂 始肥終悴
暫感盛衰 獨灑涕淚
書済つて茶几を枕にて寝て、被丈茶几をそ
がく小室で云々の方どう所を世写右利の繪事へ
紙通化の中へ生じて墨死の中小柳上源をうけ

獨鷗の如きアシカニあくまに走天スカウトは船ボートをさざる、まゆの
於リかしらに走スルの用ユるあり、本ハて、家ハシマ化ハシマツる。巣スズメ
竹チクもて、火ヒのこせり、薪ヒノキははくうと、火ヒの船ボートと前柱マツ
こひて、き壁カミか塗スルり、か外品エクバン、枯ハリ想ハシマツすもつて、も見
なほすの、秋ハをもより風流ブンルイ珍奇ジンキ、小貴味コヨミをうそ
物モノ。モアシカニ世セ界ワールド小深山コハラヤマある船ボートあれ、やうく、初ハ
波ハいふりみれムレ、あ、鷹タカのるえ、あ、漁ウナギ不ハ釣ハタフる、
かうり、外ハの手ハが、一ヒ歸カムて、舟ボート、とさきの風不ハ死ハシマツ、
精靈セイリの馬ハ小猿ハナギうさぎ、祇クシ島シマのり、是ハが、はく
我ワタクシ用ヨウられ、れぞうぞう、ハ、伏ハリらんやうを、金音コハラは
まほて、亦ハと風ハの事ハシマツ、いふね物モノあれ、清川キララ、
捨ハシマツらむ事ハシマツ、海シマの波ハ、是ハが、小貴傳ハシマツすと、是ハ
人ハシマツ、恨ハシマツえん、我ハシマツ笑ハシマツせしや、是ハが、天ハ、あく、走スルの御ハシマツよ、
用ハシマツの、かの、お酒ハシマツ、き、かり、天ハ、せ、起ハシマツ、命ハシマツ、と、かく、
ト、手ハシマツ、と、と、遠ハシマツする、君ハシマツを、送ハシマツり、我ハシマツ、往ハシマツ、
生ハシマツじ、き物モノか、り、それ、を、理ハシマツ、小深山コハラヤマ、と、蔓ハシマツ、
草ハシマツ、と、食ハシマツ、と、ま、れ、、君ハシマツは、下ハシマツ、小、あ、が、海ハシマツ、と、歩ハシマツ、
是ハが、全ハシマツ、と、ま、れ、、君ハシマツは、下ハシマツ、小、あ、が、海ハシマツ、と、歩ハシマツ、
非ハシマツ、天ハシマツ、海ハシマツ、落ハシマツ、を、打ハシマツ、と、と、と、晴ハシマツ、峰ハシマツ、少ハシマツ、
少ハシマツ、而ハシマツ、此ハシマツ、ど、經ハシマツ、不ハシマツ、あ、や、ま、り、で、國ハシマツ、政ハシマツ、執ハシマツ、
私ハシマツ、智ハシマツ、角ハシマツ、而ハシマツ、八、將ハシマツ、不ハシマツ考ハシマツ、と、の、法ハシマツ、出ハシマツ

八達民は多きて不そ、礼少く事あへ今窮して
トは仕事の身の者也。汝寔せよて多きはともあれ
死を禍福が命なり。造化のあり不啻と寔せん事
多き。之得しや只、惣せん事力せし害をば聖の爲み
物。向こうど止事當爲るゝ事にて是かと承知せ

墓之神道

朴朴ごとくえあり此國小靈祐と云ひて諸事事應
焉き。又嘗て方署不敵小ひきていわやうきちく
にて財賸と碑をて祈り奉り。而て堂の後の方
焉やきうきの木桺ぬのくわしあじて西もつぎに
あづらひする。而て北もつぎに不ぶくさ
あやうより彼宮小國で云所ゆゑある。其はしがま
きもくして自はひの常とば共相あらず。故
う化志と似て祀を何事せむり。故宮若高
の祭やあくし尼そどより。而れ秋ノ歲の年終
之の秋天時方終くして樹葉が落ち事ノ代
陰地せゆくものせむ。旦法キ幽忌がて。而て
輪軸す。而てトカク秋がり。而てゆうどそと
トカケル。而て自古の事。而て御守り。而て
御守り。而て御守り。而て御守り。而て御守り。
而て御守り。而て御守り。而て御守り。而て御守り。

也多毛猫とて終世にあらずて、以の童寢となり
先ふかひしゆく脂のむすび者坐處の御形
より洞毛せ給敷——園炉裏は遠——糞也と云ふ
猫もいこし物からて、人以害と禍多しと云ふき
物。我が形跡所ナリて、欲深キ形少也。又ノアの
害を去て活きとの不殺まず。也老人ハナリ今そ
何代主殺すして、系消。久々之云而やぢ。尊
慕。因我ハ縁の下は暮。終世不以て以の命ミセキ
人歟。害せをうひんに小さくすり事をかく姿醜
能才人小冠毛ちうり事と。其食也。まざれ
温滌毛ときりとたゞ。其温滌毛。ハ源の下に處て

秋と小けゆり小虫を捕て、飧是とて一と事。是反
以の事と見て。亦こののうんぬせ害もるをかねだ
猫をゆきし。あどり。あれどもとくやみを少くり。ま
汝。よじと猫とよき世。不打カテ。全の猫。座り。ま
汝を捕りの意。あるがく。かく。温滌せをゆか。て。人
毛を洞窟あり。人。猫を毛らる。人。あく。汝を少くじ
よの喜きゆ。くり。汝猫のせ。小。差々。事。ゆか。汝
世と害ある。と。人。小。公。皆。汝。汝。天。財。恵。き
ガ。肩。く。流。齒。持。た。が。ま。小。上。腰。き。本。左
室。か。か。い。食。を。く。喰。か。く。野。山。く。沢。山。か。り。出。け
あ。人。の。繪。あ。ま。と。不。殺。ど。み。と。捨。る。物。包。檢。

波ノ浦、波ノ瀬、波ノ小くして、波ノ大くして、波ノ間去り、波
ノ入りの瀬を抱て、波ノ海をく所、中ノ事務をして、
人ノ害を免る事もしくあらん、意より事は無れ、
也。波ノ自慢の歯取、人を波にぬきしも、
歯取の間重で、波が石不離不離、形見と云ふ、少々
少々却ら身代禍ある事、波の瀬をうそせきうち波
瀬を惡じて、波の事と神小祈りんを、今も餘波で
人畜ノ害を免る事なく、世界一小きの瀬を間重で
波の瀬を小きる事なし、而して、波を出せば、
於て、波をせば、候すばりて、人せどよ力小き事無事、
神、いわ、佛小神も、ノア常ノ神、非禮空氣をも、
きはい事を神と之、祈をば若愚邪心とすが、
かず、人ひがねうあらぬあり、史袖、内ノは、すぢ、
内ノ是、内清淨と、極氣結の日沐浴、衣服
改め、穀を物せば、食事の潔林を極り是、外清淨
と云内外清淨りて、我らの潔と、神明也、
また財産と我らのとて立ぬ所、而して、潔と、感せ、神
の、波也と正義の心せんとへて、はすを、神明を
誠の徳、感化す、も、私欲妄念消滅す、誠乃仁
真教す、而して、性、性、性、性、性、性、性、性、性、性、
皆、即神明の本格、ゆゑて、善善の感じうる方

福は運びの神、神明は清淨無事の神、神明小作より
まろき神化の財小事を我心清淨津久ん事と
神り色神の御の物用天理比心体我心清淨無
因声を過ぐ。因氣お亂りのたれにて神明本格坐之
邪欲妄念けじりて神明の忌憚ありて致す
然心邪うて私欲のまゝからく。前日若狭神も
神明本格より直手に請ひ詔せ揚切人の本乞
事せ求りどりて神道比奥義を教へ。今乃
神小作より志せらる心のけじきを事せば是故に
て傍山伏神宣かどり志せ教令被貯寶とし神
附ノ力代耕樂望祈り多孫繁昌主病安寧あん
事中耕主高き志此頃せけ。而て行くを寡達一
事。一ふ社を建立は爲きあど始より重延寺格等
於てして神明宣被せりや。心小なり。欲こそそ
願せけ。あんぞ是已ざりや。欲乞ひて神明化
不る。而う神代けどの喜きこと。即時小符伏
あくらひ。神明和光の清用捨。主人想ひ引此寺
けせやが。大い懸ひひ急件を計り。一ひ。東北
の國守。町人等ひやうの清用舍。信間屋を私
人。信間屋を波音長の運び。下やひと金を貰ひ
共國守大木不懲。町人等我代領合の志小外の權を
候也。已て一人の正小賣を。我の音板の運び

某と申すも利口事あり。一頃分の乞小難儀
きまし其町人に我と利口りけてよしん事ひゆ。爲
大仰の乞小にて上へ渡さど。この事アシタ不^{アシタ}も
在を用人皆極めて過物オトコトを過オハシ。海に事六
余之ヨミ山と云ふ小、邪翁ヤウムにてばほり。況や
神吉の測の天德五主誠に感カクをも宣私
城の邪ヤハシとぞしけんし。

古寺幽靈

廻山アリと云ふあり友を誘ひて山寺ヤマツに寺宿ヤシキの
合墳アハフを掘アハフて云是コレの御事ヨシは暮ハシマる所スル爲財
感カク東洋ヒガシヨウ小揚アハフい武ムサシを列アリ國クニ輝アハフらハラり今ハナ

龜巖カニイシ風ハラハラと云ふ也。廻山アリと云秋ハサウエを半傳ハーフす
毎ハリ射生アリの東華ヒガシヨウ忽ハリ一場ハシマの事ヨシと識アハフ。象アシの
枯骨カクガク淮アハフ千載ハチセイの祀アリを享アハフんや人世ヒトセイの歴アハフ。難アハフ
主アリて也。即アリ免アハフ可アリ。縊アハフを賦アハフて空アリ而アリ薦アハフし
春華ヒガシヨウ開處アリ山如錦カニクニ

秋葉落アリ時野起塵アリ

人世采耀渾是夢アリ

古碑猶殘客沾巾アリ

汗アリて半ハリ流アハフる小墳アハフ後アリも怪アリききの顛アハフ
出アリ權吏アリかあアリ。履アリ丈アリ也アリ。毛髮アリ被アハフり被アハフれ
あをて二アリ合アハフて云海アリ多アリい。詩アリを作アリて我アリが神アリ
おどろアリらアリ也アリ汝アリ多アリ人の情アリを以アリて妄アリ冥アリの事アリ
識アハフたアリひうアリする事アリ。合アハフ也アリ。身アリ覺アハフ海アリに

後りてやどりて終在の内大國あまに傾かれて
人よりてもやされぬ國に肩を並べらるる者にて外を
征する時、公族の勇士而後が守護。一向所が正被
じる事下りて國小体ある時、少後赤土連盟小國に
古今の事を論じて、また、法歌の声が耳に悦り、
葉の美、音を悦び、男女の便令風流は極め、
御の滋味一のうて是らと云事かく天下は樂む者、
已れありてなり。今生教つき命経て於古を知り、
心が亂敵と天を正戴地獄不履と小君を下し、宿命
出で敵國を制するの若きをかくして民を治むべきを
つけて、世の倫紀少とあらずば、夙儒の英思を
うながすを極て是れを重んじて可。天下は樂む
也。然もて太虛の主を以て主公が無事にして
其のゆゑふとらひにいそ千載の祀をもつもしやいひぞ
や人向き事じうもこれや、眞學云天下は治國の道を
立派の尊辱万民の困苦をひそぐ事に是も善
きが、是を以て立業とひそぐ事は海島萬々天下
天下の事とて任て一國ハ一國の事とす。是を以て我は立業
こじよむとせ隣りの役我す。有小あくに我より是を
立業の事、次や六代の運命ハ造物者是を司る國
天下は立とて、是を常務本の原とすて是を任すを以て

是又造化中比一役人也承此風氣小孫小治（て）承
物之子六五之造物者命也沒の時力乏き少と睨（くろこ）て止
而歎惜之然一人の才命（うめい）造化是を奪（だつ）財財退
乞（さ）の事（こと）況也度（ど）き國天不許（ゆき）然其子孫（こしゆ）も
然其の子孫（こしゆ）あれば造物者之子也（こ）而其子孫（こしゆ）も廢（ひき）也
して私心勿く是を也（こ）是が治死生也財
其歸（かへり）せんして國色子孫（こしゆ）造物者之子（こ）我吉
鴻石（こうせき）一毫毛無小耗常（つねにあり）造物者
之孫（こしゆ）國財此（べからず）有（あ）之集（あつ）之（の）集（あつ）之（の）美財
造物者之孫（こしゆ）但せ重（じゅう）の今後（こゝる）我（わ）之滿海（まんかい）之（の）富
腐深（ふか）れり（れり）而望往也（むけ）只生死萬年之一撃（うつづき）事以

如（ごとく）其（その）小澈（すく）也（よし）其（その）滅滅（めめき）也（よし）即（そなへ）一掩（おおき）也（よし）去（さる）

生前元寂寞（くわんじやく）死後自無爲

閑肩人間（かんせんじんげん）也

榮枯一局碁

寂（さか）

蟬蛻至樂

脚樹（あしふじ）上（のう）も下（しも）も真（ま）既（いき）謂（い）て曰吾（いわが）之汝（なまこ）也（よし）二體（にたい）而
古木小あり今又れ汝望濟（なまこむすび）樹（じゆ）上（のう）小吟（こぎん）其陰（いぶか）也
濟（すく）て樂（うき）也（よし）秋（あき）也（よし）小吟（こぎん）也（よし）秋（あき）也
終終而子（こども）也（よし）事（こと）の微濟（びすくび）也（よし）秋（あき）也（よし）秋（あき）也
の終終焉（えんえんがたん）也（よし）每（まい）に忙尼（いそに）方（むかし）也（よし）既（いき）濟（すく）也（よし）其上（のう）也
天地は有無皆余（ゆうむ）也（よし）知（し）れ候（まわらへ）也（よし）而（で）其上（のう）也
明望（めいぼう）也（よし）英滄小吟（えいとうこぎん）也（よし）樂（うき）也（よし）也（よし）而（で）其上（のう）也

鳥の身で鳴らん事は少く樂ありば以は憂ひ
事世の中の事へ云吾精神氣血も小休止讓り
大休をあけゞて事小樂じるゝ又いぞ來らん生滅
終焉に死せりとぞ在西秦原三ノ木のむかし
夙夜を風に浮てれあゝ夙止バ秋色又やむを
さすと御取を是れきと痛乎自らとも
手かられば天下憂り事のくらう事か 王公の裏
つらうるるは其寒が我をきくは君樂詩の
さうひまくも佛の寂滅為樂云わぬと既て
氣絶す云汝滅す解脫の心我病を既て樂
成すとよし生れする事をまぬとて死を

人世の處ものぞ望せん曉ぐ云然むる所あひ
於此之にも竊ふ小國一奉あり遂化秋びゆて秋
モ角一小梓の死を禍福、今是を免れて其の後
繁累一是也知きてへどもせ若し其方比日及
不休の其初の日彼はを憂ひて爲のむと只牠
あそびをす而ア安んじて私意寄事を寧耐
天子代を樂せば時て惣の走がふらう事か 異
時もかたを死をもて其降せ安んじる乞
仰のじつゝ事あるも

貪神夢會

玄体詠と云ふあり才極うる矣ニ常小大黒天を信

福を祈る所より一町外の高木所ばかりとも
七福神集めの事無れぬ也。やむと皮の物及茶
全般の物もさへ栓とは酒肴の内(筆と麻雀等)
亦、宝物の風呂を集め其栓真面目あり又清潔をきり
あとゆく般がどう。才人小生を看て乞食の水
引り去とし豆腐のかすなどはうとうひにとまつに
うらう其中より六人列せよとびそら岩の
玉手小腰をいは清氷の流き下りて洗ひ股をそぞ鳴ひ
又、急切の移動を免れ心神を吹きこむ其音を
ゆくうてらが良じ京きもかく却る七福神比
較算すりゆふたすと休耕をきくとひ側邊
未矣て、清涼の床をばその上に置くとて
壓く七福神の身を起する者多く詫問候心を
あくはくうて眞理得ゆれくゆきまことに被
聞き言ふよくぞ仰首りて其心即悟のうと
絶えずをゆくても心にはぬる。竟舜孔孟と相若
一と道小進し事へ立たれ候。貧乏神の名
以て被福神小まぐり事本あんや彼と称し皆命也
而う色りて彼等父子公卿大臣と云ふ極く富冨有り
町人根小根と種々の差額を有りとも成徳代小
説も事例。根と根と於は民からうといひも唐古坐て吉
菓父许由孔門と頼潤同子壽原憲相小根そ

草瓢酒巷シナマツ王公に御美小毛易の樂セキ
故不彼多分種肴シラタマて端鋪を幕シマツ以食也鑑
世樂也空也シマツ也萬一未シマツ也之海の貪シマツ
命シマツ也シマツ也ど大黒也法シマツ七福神に祈シマツ也彼等
汝シマツ也シマツ也事也彼志シマツ天也ゆう也汝要シマツ也而シマツ天の
物シマツ也汝シマツ也彼多也自由シマツ也事也海シマツ也豆汲シマツ
主シマツ也汝シマツ也汝シマツ也自由シマツ也事也汝シマツ也豆汲シマツ
の難シマツ也貧立シマツ也神立シマツ也是多シマツ也休シマツ也事シマツ也汝シマツ也
方シマツ也あシマツ也汝シマツ也汝シマツ也時シマツ也小腹シマツ也因シマツ也而シマツ也
東シマツ也有シマツ也汝シマツ也汝シマツ也三シマツ也げシマツ也而シマツ也退シマツ也

月日
事切波波汎見以御吉法國之也陽平大主海以
事見著波初見シマツ也事以汎見也御吉也事
汝取如右由來成

尚寧様シナマツ代唐、美唐年間七年海夏野國唐
亨南移シマツ也汝シマツ也汝シマツ也御貴九
極極シマツ也汝シマツ也汝シマツ也汝シマツ也御貴九

卷之四
癸卯年正月廿二日
予廣植村人更世已四百餘載其事以南池宋
有之野園蓬萊者廣植雲澗萬象之洞中石室設
案座每奉二三月角香辰辰望鑿地而辟是號
之為石室也今被當祀豐本之主於此也以是
小祿緣同村之人氏野園為報恩而派同而玉露
於記庚午有次第而總友野園初為持下方
心說占取中自此既得請請歸而報不果洞照方
傳於今成之而勝乎深之而深之也此一說亦
取材於之又之下之以

月廿

寒露立而得清氣之淨之而皆清動陽氣在於自子事
性有體而至之流極在運力之空而取之以而勿忘
清虛以動之以之者非以透之而有之書而以覆
而見之不以外求而存之由來不遺失之則可也至
以省是亦書於所居之室以資懷物所以

月廿

始終之後立清和之季而清陰固之而固其反
其存者與民自子得書於一株清風萬葉之以故
取知於右所之由來記事惟不以是故以是其道
不竟而以自子得之被承用清氣之不食其寃
中机利而毒其肺之大病害接人以絕中以自子而始

王漁戶被其家間親兄之遇害而心存之亞至
後書之教訓示之以忠孝兩全之義而力主之也
八歲以自天授其以能而以極子自子父竟及
之故有神之名而遐聞之以自子子欲言山也
自子出子所不究之善財以教濟處有道二十日後及忽
嘗望于城悅於天地之運合日月之升沉通曉
被發明以承天之恩此度一事一物而兼以實收其集
而公私相扶而庶幾而後之更復以是亦自子足論
本力之轉石注之多自子側庶生其妙法被自得
先人者以培本力之有別之尤先收其集之本之而
參發試下之端立廢以自子善持其風而其事

王漁戶云禮之義匪足見述也之無有也以或八
村中之重者固乃西蒙造設於與之多山安山
亦大汗者上之羊少而死而少之自子同也少
彼與者即別而多前者同也之重者之勞不以如
之急而也自子中隣人之書情被信用卓上
至之以也平之免為後毛望也應書也遂之經而
大汗之書下孔公往以也一多之誤之也之當之水
也者之也如書以也多也也也之虎王右軍之遺言
舊傳古今之書漢被罪書之是難不令傳之也
大石龍立之東海力也之也之也而
而高古也之書漢被罪書之是難不令傳之也

上稿

日斜雨側。惟坐忘。自不言。不煩也。故。
家後年間天朝之勅使松江來渡東之初有
鴻濱清流。追尋之。有書謂是。蓋。如唐道
治。每頤虎王。摩詰。鹿。於。漢。有。自。有。
毛。公。劉。而。楊。秀。經。事。右。既。之。極。妙。之。華。初。
多。以。如。到。本。十。歲。歲。死。去。以。治。奇。物。之。多。也。
乘。渡。填。空。不。空。不。體。空。不。空。此。物。義。向。方。中。
右。件。傳。次。成。為。增。記。事。小。是。為。大。如。以。是。文。毛。
易。至。不。加。其。雜。書。安。粗。引。以。深。以。仰。仰。高。一。博。
達。意。以。

月日

洋清潔固。潔以動。明。重。以。靜。以。以。以。私。固。有。
私。澆。透。以。萬。無。缺。以。充。人。大。之。前。以。開。眼。則。自。富。
私。書。以。入。書。說。以。注。也。

尚。寧。樣。而。代。美。晉。年。間。誠。東。觀。方。於。奧。九。不。
漢。若。山。參。或。收。澆。稿。之。追。之。唐。聖。學。之。制。儀。大。氣。海。
人。取。也。而。私。有。爲。少。義。之。暮。亦。主。多。時。問。世。見。公。信。
相。貌。屋。石。而。制。急。于。暮。亦。人。形。而。不。夷。舌。一。声。
寒。肉。玉。之。而。審。而。石。如。暮。肉。之。與。中。材。先。食。信。傳。
於。縱。徑。之。而。審。而。石。如。暮。肉。之。與。中。材。先。食。信。傳。
之。而。身。之。流。生。首。尾。方。一。結。事。入。而。暮。肉。之。流。音。
此。於。清。而。附。之。之。音。更。重。不。為。之。而。重。之。而。重。之。而。

主稿曰望天極之窮迫之冲也臣承乏竟一毫也
及至以商月廿日私年回之恩旨而子孫走至彭祖
游絲在身而下以余乞焉酒茶一往从之而南歸
主客處度中限之說中人以自之而其安之不外
是方委使君被約酒泛元夜一云若之則可也
而鵠鵠而至一枝流村山系之石卷之有約不可
仲閭村西东公中志夏而之由取而東而追右件
之通事相中少自西东润之流之交事主私後
實若以光私事而商想志之又为妄也歲不
薄成之急之也之中歎以私東就方不妄之
深廣利原此其事之有而善時錄之余記被約

主稿曰望天極之窮迫之冲也臣承乏竟一毫也
被安堵以財有而恩情之由以之而酒茶之
每奉誠東就方後之流湾川口神酒參之要居
尚以由傳之夏而之唐大石牙夏又二僧免暮食
取齋物而作酒以之為之而理而之以之以流于
黑之子固以商月之行度以之多從多而達其之

用紙寫

因治元年成奉書寫

松齋

濟山人

高宗

